

連載
第21回

福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

大正から昭和にかけて

3、「日蓮宗大学林」創設の証人・柴田一能上人

大正十三年、旧大学令により立正大学が設立された。品川区大崎にある立正大学は、多くの日蓮宗寺院の子弟が学ぶ専門の大学である。当山の随身生も現在に至るまでそこで学んでいる。立正大学の設立は大正時代であるが、その前身は明治三十七年四月一日に開校した「日蓮宗大学林」である。この大学林の設立には、当山三十三世及川眞能上人と、明治三十六年九月に米國エール大学を卒業し、帰朝したばかりの柴田一能上人（及川眞能上人の弟子、のちに当山三十六世となる）が深く関わった。柴田上人は大学林の創立から十年後、大学林の機関誌である『大崎学報』に設立当時を追懐している。そこで、今回はこの大学林創設の姿から宗門の教育機関についてみてみたい。

実は大学林の発祥の淵源は、さらにさかのぼって天正元（一五七三）年に千葉県香取郡に開設された「飯高檀林」とされる。「檀林」とは僧侶の教育研究機関で、多くの学徒が集まり近世日蓮教学の教育研究の拠点となった。

徳川幕府が倒れ、明治政府が成立する

と、政府は神道を国教として政教一致を目指して仏教を疎外するようになる。こうした政策は教育にも及び、神道以外の宗教との切り離しが図られた。このなかで檀林も廃止された。明治五年の「学制」では、宗教のためにつくられた学校に通学し、公私立の学校に通わない者は「不



谷山ヶ丘に建つ日蓮宗大学林（『立正大学120年のあゆみ』より転載）

就学」とされるほどであった。

日蓮宗では、こうした事態のなか、諸宗に先んじて「宗教院」という独自の教育機関を、芝二本榎の承教寺に創設していた。宗教院はのちに「大教院」と称され、ここを本部として宗教・教育を司ることになる。また、全国の寺院をいくつかの学区に分け、各学区とさらにそれよりも小さな範囲の各府県に「中檀林」「小檀林」などをおいた。

柴田上人は大学林が、「當時世間側では中等教育普及の潮流が滔々と押し流れて自然に宗門に於ける中等教育の土壌をも突き破って」、「社会一般の風潮が教育中心で、各府県は競って中學校を建てる、各宗では……（中略）……學制を刷新するやら校舎を新築するやら文部大臣の認可を取るやら……（中略）……大々的に頭を擡げだした」と、急速な教育普及という当時の社会的風潮、また、その動きにあわせて各宗がこぞって教育機関を創設していたことが背景にあったとしている。

柴田上人は及川上人とともに建設予定地である「人も通わぬ谷山ヶ丘の麦畑の眞中の普請中の校舎の片隅」の事務所に詰めていた。当時この地は「敷地の過半は孟宗藪で囲まれ残りは栗や櫟の雑木林に蔽はれて晝な

お昏く、夜は尚更淋しさ増して狐の啼き聲は毎夜のこと」であったと言われている。柴田上人は創立委員秘書役として、大学林認可の出願書類のとりまとめなどの準備に奔走する。明治三十七年二月一日には、上人自らが当時の内務省、文部省に願書を提出した。そして開校式の翌日四月二日、文部省より私立専門学校としての認可が下る。

明治政府の誕生により、仏教各宗は各々教団の建て直しが求められた。それは子弟教育にも及んだ。日蓮宗は近世以来の「檀林」を基盤としながら宗門の教育機関の創設に努めるが、一方で教育の発展という社会風潮の中で、社会の一員として僧侶にも一般教育が求められてきていた。こうした宗門での子弟教育と、社会での一般教育とのバランスを模索していく中で、「日蓮宗大学林」は創設された。当初は専門学校として始まったが、明治四十年には「日蓮宗大学」として認可され、大正時代の立正大学の創設につながっていく。ところで大学林の入学試験について「日蓮宗大学林の眼には舊中檀林生と云ふ者は認めるわけには行かぬ、一々入學試験の成績に依って取捨せねばならぬ」と柴田上人が記している。檀林生という経歴を考慮せず、試験による選抜という姿勢に、宗門としての新たな教育機関設立への意気込みをうかがうことができる。

なお、柴田一能上人は及川眞能上人とならんで、昭和八年十月、立正大学創立三十周年記念祝賀会において創立功労者として表彰された。

（つづく）